

きたのであった。

このころになって悲観的な感情が支配し、死ぬことを考え出した。この体で手術に耐えられるか、万一運よく手術が成功して帰っても隻脚の身、到底敗戦国の中、激しい生存競争に打ち勝って行く自信がない。それならば、ここで一思いにと、死ぬ方法をあれこれ考え、結局手っ取り早い睡眠薬自殺の覚悟を決めた。

毎日もうらう睡眠薬を二十四服貯め、一挙に飲んだものである。幸いにして発見が早く、胃洗浄の手当てでも有効で、心臓が人並み以上に丈夫だったことも手伝い、助かったのである。

人間は少なくとも常人である以上簡単に自殺できるものではない。自殺者は精神異常者である。私も長期間睡眠不足が続いてももうろうとしていたから自殺する気になつたと思う。つきが落ちた私はそれから生き抜く自信ができたものである。五月のメーデーが終わって間もなく手術が行われた。板張りの手術室、土足の医者、病院長と高島軍医（鳥取県）、看護婦二人（何れもソ連人）、手術室にはいる一時間前にモヒを二本打ってくれたが、

全然効かない。手術は高島軍医が主になってやってくれ、三時間くらいかかったと思う。局部麻酔、輸血なしだから高島先生は止血に苦労したと思う。鋸で足の骨を切る音を他人事のように聞き、神経を切るときの脳髄にズキンと痛みが走ったこと以外、さして苦痛は感じず手術は無事完了。術後の処置は滅菌食塩水だけで、化膿どめなしだったので患部は二日目から化膿し始め、熱も三十八度を超え、食事も全部吐いてしまい危険だったが、何とか乗り越えて、一か月半くらいで完治してしまった。帰国したのはそれから一年以上もたった入ソ五年目の八月二日高砂丸でした。術後二回も帰国名簿に乗せられたが、その都度政治部員の検査でハネられたのでした。

拉古での収容所生活

新潟県 村山家司

拉古での収容所生活

終戦の八月十八日に武装解除後に、拉古にあった収容所に十月の二十四日まで収容される。

食料の米は靴下二足に詰めただけで、これは数日間です。その後は付近の日本の開拓団跡にあった畑のトウモロコシを主食、とってきたものを馬ふんのみで焼いて食べるだけ、それがなくなると、食料探しに開拓団に行き、砂糖きび、砂糖大根など手当たり次第に口にはいるものを取って食べて空腹を満たす生活が続く、しかしこれもなくなると、馬糧のコウリヤンが主食となる、何回も渋抜きをして、つぶして食する生活が牡丹江から帰国するというわりのときまで続く。終戦は八月で被服は夏物、冬が近いというのに夏服で、寒さと飢えて体力は著しく低下、毎日食料を求めての生活であった。ある日の開拓団で、満人がその部落を占拠しているのを知らずに食料を集めたので、怒った彼らに大鎌や銃で追い回されほうほうのていで帰隊したことがある。武器を持たない無力な軍隊の悲哀を知った一幕でもあった。全員が極度の食料不足と寒さで入ソ以前に栄養失調状態になっていたのである。

裏切られた帰国通知

日本に帰るとの通告で、なげなしの私物を取りまとめ、ご丁寧にまきまで用意させられ、喜び勇んで牡丹江市に向かう。弱り切った体にむち打って、駅で上段ベッドで仕切られた貨車に乗車する。しかし列車はなかなか発車しない。ようやく夜になって動き出す。でも運行するのは暗い夜間だけで、明るくなると停車したまま一、三日で到着するはずのハバロフスクに幾日たっても着かない。明るくなって列車の進行方向とは反対の後方から太陽が上る。我々には帰国の夢を絶たれ、これからのことを考え悲嘆にくれるのみであった。

第一四〇作業大隊での収容所生活

乗車一週間後の十一月三日、シベリヤ鉄道の分岐点との駅に到着下車、雪舞いのなか収容所に向かう。ここで冬服（満服毛皮の外套、フェルトの靴）が支給される。二日ほど休養をとった。今後のことを考える。かわいそうな子羊どもであった。ここから奥地への作業大隊の収容所に向かうこととなる。この雪中行軍は一週間にも及ぶものであった。食事は歩きながらソ連兵から与えられ

る。あの黒パンといわれる、正月のふくで状の凍りついたカチカチのもので、与えられるものは数人に一個ほど、勢い元気な者が、命の綱のパンを独占することになる。弱者は振るい落とされ、落伍し後方に送られて行く。彼らの運命やいかん。一日中歩いて夕方着いたところは屋根のない掘っ建て小屋（昔の鉄道工事の作業小屋とか）これならまだよい方で、野宮の場合もあり、一晩中交代でまきを集めて燃やす。このたき火の周囲でごろ寝。この雪中行軍で幾人の友が亡くなったことか。

その上言葉が通じないために、用便で隊列を離れるものでも、我々の眼前で逃亡とみなされ小銃で（我々は自動小銃をマンドリンと呼んだ）撃たれ、恐怖と不安、飢えと寒さで千人の我ら百四十作業大隊は、入ッ後初の収容所で春までの間に、疲労と栄養失調、それに発疹チフスの流行で半数くらいになってしまったのである。

鉄道路盤工事作業

春になると鉄道工事、この鉄道は独ソ戦の折、レールを取りはずして本国に持っていったとのことで、作業は線路わきの排水用側溝づくり、工兵隊出の老下士官殿が

作業長となりトンボといわれる道具をつくって傾きを測量して作業を進めるのである。暑いときは裸になって汗だくの作業、午前午後二回、十五分間休憩する。このときには、帰国のこと、家族のことや、故郷の料理自慢に花を咲かせる楽しい一刻であった。休憩時間中に警護兵がマンドリンを発射するのにはびっくりした。空葉きよようの数がそろっていればいいのだそうだ。九月中旬には降雪、ツンドラ地帯での側溝掘りはノルマどおりには進まない。ノルマが達成できなければ食物は減らされる。我々はまきを集めて溝に積み重ねて火をつけて帰隊する。翌日来てみると残灰の下は解けて掘りやすくなっているのである。このような工夫をこらしてノルマの達成に励んだものである。そのほか通称「井戸掘り」という湿地帯での井戸掘り作業。これは砂利の層を掘り当てるという路盤工事用のバラス採取の候補地となるであろう。ここでも帰りぎわには側溝掘りと同じ工夫を実行したことは当然である。この穴の中のぬれる冷たい作業で発熱、テルマの病院に入院することになった。ここで武装解除後行方不明になった中隊の斉藤候補生の元気な

姿に接し、入院中種々ご厚意をいただいた。

深夜のバラスおろし作業

退院後の二、三か所での作業を終え、帰国するまでは線路の補修と鉄道敷設作業であった。枕木、レールの敷設作業では私は鉄道隊出身なので割合楽な作業といえた。これにはウラがあつて、それは深夜の作業が待っていたのである。九時就寝、やっと眠りにはいったと思うころ、全員起床させられ、貨車に積んであるバラスを線路上におろす作業であった。積んであるバラスは凍りついていて、スコップでは歯が立たず、ツルハシで打ち砕いてそれを少しずつおろすのである。作業時間も含めて夜の二、三時間にも及ぶこの辛い作業はシベリヤ抑留中の最も厳しいものであった。夜は徹夜の作業、昼は普通の作業と全く非人間的な労働であった。

ソ連抑留手記

宮崎県 宮井 正則

ソ連軍侵入

朝鮮咸鏡北道羅津重砲兵連隊に所属する私たちは、甘吐峰陣地において昭和二十年八月九日突如として大空襲を受ける。

ソ連軍から攻撃を受ける状態が数日続いているうち、関東軍は集結せよとの命により行動展開中、富寧において日本軍は降伏したとの情報が流れた。いや日本は降伏はしない停戦だろうといっているうち、八月二十一日のことである。日本軍はソ連の指揮下にはいるようにとのことで、兵士たちは大混乱状態となった。中には脱走しようとする者もあった。一人で行動すると命の保証はないぞと脱走の制止につとめたが、こうなれば私たちは集団行動が一番安全であると判断して行動することにした。